

借りる場面における述部表現の日韓比較*

－物の所有・領域意識からの考察－

盧 姓 鉉**

(e-mail: chel99@hanmail.net)

目 次

- | | |
|----------------------|----------------------|
| 1. はじめに | 3.3. 補助動詞としての日韓の授受表現 |
| 2. 先行研究 | 4. 分析考察 |
| 3. 考察データ及び用語の概念 | 4.1. 本動詞 |
| 3.1. 考察データの概要 | 4.2. 補助動詞としての授受表現 |
| 3.2. 動詞の分類－二項動詞と三項動詞 | 5. おわりに |
-

1. はじめに

近年、日本人と韓国人の接触する機会が増え、お互いの理解を深めることもできるようになったと言えるが、時にはコミュニケーションがうまく行かず、いやな思いをさせられたという話を耳にすることも少なくない。奥山(1998:115)には日韓ミスコミュニケーションの実例が紹介されているが、その中に次のような逸話がある。

(状況：韓国人のミナは恩師の知人である野村教授の観光案内を頼まれた)

- ミナ 先生、お荷物重いでしょ？
野村 いいえ、それほどでも・・・。
ミナ わたしが持ってさしあげましょう。
野村 いや、すみません。

* 本研究は、東京大学21CEOプログラム研究報告書(2008)と博士論文(2009)の一部に修正を加えたものである。

** 高麗大 言語情報研究所 研究教授 社会言語学・日本語教育 専攻

上例で、「わたしが持ってさしあげましょう」と聞いた野村先生は、「何か押し付けがましい・恩着せがましい」と感じられたと思う。だが、韓国人のミナは恐らく好意で礼儀正しく丁寧に言っているつमりの韓国語「제가 들어 드리겠습니다」を直訳して「わたしが持ってさしあげましょう」という日本語を用いたはずである。この場合「わたしが持ってさしあげましょう」を「お持ちしましょうか」というように言い換えれば、誤解がなくなるであろう。つまり、主語の省略、相手の意向を尋ねる疑問形の使用、授受表現「～てさしあげる」の使用などが日本と韓国で異なっているため、このような誤解が生じたものと考えられる。

このような接触場面でのミスコミュニケーションを防ぐためには、具体的な場面を取り上げ、各場面におけるコミュニケーション行動の多様な側面、例えば、疑問形や授受表現の使用の側面からの詳細な分析が、第一の課題となると言えよう。

そこで、本研究では相手の所有物を借りる場面¹⁾を取り上げ、恩恵が表示される述部の「補助動詞としての授受表現」と「本動詞」に注目して日韓言語行動の特徴を明らかにし、物の所有・領域意識からの考察を試みたい。このような研究成果は、異文化コミュニケーションや韓国人向けの日本語教育・日本人向けの韓国語教育にも有用であると考えられる。

2. 先行研究

本稿で注目した「借りる場面」は、日韓言語行動研究において敬語研究或いは韓国人学習者への日本語教育を考えるためのアンケート調査の項目としてしばしば取り上げられてきた(荻野他1990、李鳳姫1990など)。相手の物を借りるために行う行動は、従来の研究では「依頼」という用語で扱われてきたが、依頼行動そのものに注目した日韓対照研究としては、生越(1995)、河村(1999)などの依頼文レベルでの考察、嚴廷美(1997、1999)などの談話・ストラテジーの側面からの考察がある。また、依頼行動を行う際の依頼主の意識に注目して日韓の依頼行動の違いを考察した尾崎(2005)・姜錫祐(2007)、無言行動を含めて借りる場面での言語行動について考察した拙稿(2009a, 2009b, 2012)など、様々な角度からの研究が蓄積されてきた。

依頼言語行動は話し手のために相手に何かを頼み、その恩恵を話し手が被ること、それ

1) この場面を取り上げる理由は、実際自分のために相手の物を貸してもらう際、様々な側面から気を配ることになるということと日韓コミュニケーションにおける誤解やトラブルの経験談に「借りる場面」がしばしば挙げられるということ、この2点から日韓言語行動の対照分析にふさわしいと考えたからである。また、借りる場面は話し手のために相手に何かを頼むという点で「依頼場面」に近い。本稿で「依頼場面」ではなく「借りる場面」という用語にした理由は、調査に無言行動も入っているが、従来の依頼行動に関する研究において無言行動は考察の範囲に含まれていなかったからである。考察データの収集及び考察の範囲など調査の全体については「3.1. 考察データの概要」で触れる。

自体が言語行動の究極の目的となる。それゆえ、言語表現レベルで話し手の受益意識をどのように表示するかは、この場面での言語行動の特徴を捉える上で、欠かせない観点である。にもかかわらず、受益意識の表示の側面からの日韓依頼言語行動の研究はあまり見当たらない。無論、奥津(1996)、鄭惠卿(1995)などの日韓授受表現に関する研究はあるが、いずれも授受表現の意味・用法に研究の重点が置かれている。

そこで、本研究では恩恵が表示される述部の「補助動詞としての授受表現」と「本動詞」に注目して借りる場面での日韓言語行動の特徴を明らかにし、物の所有・領域意識からの考察を試みたい。

3. 考察データ及び用語の概念

3.1. 考察データの概要

本研究の考察データは、借りる場面での日韓言語行動に関する調査の一部である。調査は2004年7月～9月及び2006年6月、日本と韓国で談話完成テスト(Discourse Completion Test)を行った。以下、考察データについて簡単に示しておく。

<調査対象> 日本側：東京近辺の大学・大学院生(男102名、女115名)
韓国側：ソウル近辺の大学・大学院生(男100名、女100名)

<状況> 文化講座で、

[1] 隣の人のボールペンを使いたい。(以下、<状況1.ペン>)

[2] 隣の人の資料を一緒に見たい。(以下、<状況2.資料>)

<話し相手(隣の人)²⁾>

- ① 親友(親・同・外)
- ② 親と同じ世代であなたと親しい人(親・上・外)
- ③ 初対面の同年代の人(疎・同・外)
- ④ 初対面の親の世代の人(疎・上・外)
- ⑤ あなたと同性の年下の家族(親・下・内)
- ⑥ 母親(親・上・内)

調査票の作成においては「被調査者のコミュニケーション行動の切り出し方の選択」と「具体的な言語表現」が得られるような構成を試みた。そのため、各状況で、まず、(1)何も言わずに使う/見る、(2)手に取りながら/見ながら何か言う、(3)手に取る/見る前に、ま

2) 話し相手は親疎上下関係を考慮して設定した(井出(1992)など参照)。

ず何か言う、の三つの中から選ぶ項目を設けた。そして、(2)(3)を選んだ場合、具体的にどのような言語表現を使うかを直接書いてもらう形で調査票を作成した。

本稿では調査票に直接書いてもらった言語表現の中で述部の「本動詞」と「補助動詞としての授受表現」を分析考察する。

3.2. 動詞の分類 - 二項動詞と三項動詞

貸し借りの行為が成り立つには、借りる人と貸す人、そして、貸し借りの対象物、この三つが必要欠くべからざる要素となる。そして、貸し借りが成り立つということは「貸し借りの対象物の一時的な所有権が貸す人から借りる人へと移行すること」を意味する。このような貸し借りの事象を言語、特に、日本語・韓国語で表わす場合もこの三つの要素を項として取ることによって、ものの所有権の一時的な移動が表わされることになる³⁾。

- (例1) a. 私^が 田中^に 本^を 貸した。
b. 田中^が 私^に 本^を 借りた。

- (例1)' a. 내가 타나카에게 책을 빌려주었다.
b. 타나카가 나에게 책을 빌렸다.

(例1)'は(例1)の韓国語訳であるが、日韓両方とも借りる人(田中)と貸す人(私)、そして、貸し借りの対象物(本)を示すことによって、ものの所有権の一時的な移動が明示されている。しかし、実際のコミュニケーション場面で貸し借り行動を行うということになると、この三つの要素が常に項として要求されるわけではない。

- (例2) 机の上に置いてある友達のボールペンを貸してもらう場合の日本語例
a. ボールペン借りていい?
b. ボールペン貸して。
c. ボールペン使っていい?
d. ボールペン使うよ。

- (例3) 机の上に置いてある友達のボールペンを貸してもらう場合の韓国語例
a. 볼펜 좀 빌릴게.
b. 볼펜 좀 빌려줘.
c. 볼펜 좀 써도 돼?
d. 볼펜 좀 쓸게.

3) 大江(1975:67)では、貸す・借りるが「ものの一時的な所有権の移行」を表わすため、意味的に「視線の軸」と関係があるとし、「視線の軸」から日本語の「借りる・貸す」と英語の「borrow・lend」を比較している。日本語の「借りる・貸す」と韓国語「빌리다・빌려주다」とを対照する際も「視線の軸」は重要な観点であると思うが、これについては稿を改めて論じたい。

(例2,3)のa,bの「借りる/貸す」は動詞そのものによって「Aが」「Bに」「Cヲ」の三つの項が要求され、所有権の移動が明示される。一方、(例2,3)のc,dの「使う」は動詞そのものによって「Aが」「Cヲ」の二つの項しか要求されず、所有権の移動が明示されない。この点で、貸し借り場面で用いられる述部の本動詞は、貸し借りを明示するものと明示しないものに分けることができると思う(以下、前者を「三項動詞」、後者を「二項動詞」と称する4)。

コミュニケーション場面では「Aが」「Bに」「Cヲ」の部分は省略されることが多い。だが、実際「Aが」「Bに」「Cヲ」の部分を言葉にしないとしても、述部における二項動詞と三項動詞の使用分布には、行動主のその場の捉え方が反映されていると考えられる。従って、借りる場面での日韓言語行動の特徴を捉える上で「述部の本動詞として三項動詞を取るか二項動詞を取るか」は注目に値すると言えるし、そこから物の所有・領域意識の日韓差も窺えると思われる。

3.3. 補助動詞としての日韓の授受表現

奥津(1996:347)では物の授受を表わす動詞を「授受動詞」と名づけ、日本語と韓国語の授受動詞を素性分析によってまとめている。奥津の分析を参考にして任榮哲・井出(2001:42-43)では、日本語・韓国語・英語の授受動詞の比較表を提示しているが、その中で日本語と韓国語の部分だけを抜き出して示してみると、【表1】のようになる。

【表1】日本語と韓国語の授受動詞

	与え動詞			受け動詞			
日本語	くれる	くださる	やる	あげる	さしあげる	もらう	いただく
韓国語	주다	주시다	주다	드리다		받다	

【表1】に示したように、日本語には物の受け渡しや恩恵往来を表わす授受動詞が七つあり、韓国に比べかなり複雑な形を取っている。井出・任榮哲(2001:42)では七つの日本語の授受動詞について次の三つの組み合わせによって説明している。①主語が与え手なのか、受け手なのか。②尊敬(謙譲)か否か⁵⁾。③物や行為の移動が身内からよそへか、よそから身内へか、所謂、視点の問題である。日本語と韓国語を比べた場合、その違いは③視点の問題に関ってくる。例えば、日本語の「くれる」という授受動詞は物や行為がよそから身内に移動する状態を表わすのに対し、「あげる」は物や行為が身内からよ

4) 「動詞が必要とする項(argument)の数」によって、一項動詞(「走る」)、二項動詞(「食べる」)、三項動詞(「あげる」)に動詞を分類したのは、吉川(1995)などを参考にした。

5) 井出・任榮哲(2001:42)では、奥津の[±見上げ] [±中立]の素性を「丁寧体で表わすか・普通体で表わすか」として捉えているが、本研究では「尊敬(謙譲)か否か」として捉える。

その方向へ移動する状態を表わすという点で、「くれる」と「あげる」が区別される。しかし、韓国の授受動詞にはこのような視点の問題が絡んでいないため、日本語で区別される「くれる」と「あげる」は、ともに「주다」という動詞でしか表わせない。

このような日本語の授受動詞は「～てくれる」「～てくださる」「～てやる」「～てあげる」「～てさしあげる」「～てもらう」「～ていただく」のように、そのまま補助動詞となり、ある行為を恩恵として授受することを表現する(例4,5)。

(例4) 先生が私に本を買ってくださった。

(例5) 私が友達から本を買ってもらった。

同じように韓国語の授受動詞も補助動詞として用いられ、恩恵意識を表わすことがある。ただし、補助動詞として用いられる授受動詞は‘～아/어/여 주다’‘～아/어/여 주시다’‘～아/어/여 드리다’の3つであり(例6～8)、『～아/어/여 받다’は補助動詞として用いることができず、日本語の「～てもらう」に当たるような表現は韓国語にない(例9)。

(例6) 친구가 나한테 책을 사 주었다.

(例7) 선생님께서 나한테 책을 사 주었다.

(例8) 내가 선생님께 책을 사 드렸다.

(例9) *내가 친구한테 책을 사 받았다.

すなわち、韓国語には受け手主語の授受表現がなく、『～아/어/여 주다’‘～아/어/여 주시다’‘～아/어/여 드리다’の授受動詞を用いた与え手主語の授受表現のみ存在する。この点は、与え手主語と受け手主語の授受表現が両方とも存在する日本語と異なった部分である。

このように言語行動における受益関係の表示の仕方は日本語と韓国語で異なっているが、その表示の仕方には行動主のその場の捉え方が反映されたものと考えられる⁶⁾。従って、借りる場面での日韓言語行動の特徴を捉える上で「補助動詞としての授受表現の使用」は注目に値すると言えるし、そこから物の所有・領域意識の日韓差も窺えると思われる。

4. 分析考察

本調査の有効回答数は、日本側2591件、韓国側2374件であったが、その中で、言語

6) これに関連して、近藤他(2012:57)においても「授受動詞は単なる語彙項目ではなく、広範な文法現象と関わって日本語における物事の捉え方の体系を端的に示す。同時に、恩恵性の表出は丁寧さの表現と結び付き、また「てさしあげる」「てくださる」「ていただく」という敬語形を持つことで敬語体系に組み込まれ、配慮表現、特に働きかけ表現に不可欠の存在となる」と指摘されている。

表現を伴うものは、日本側2375件、韓国側1740件であった。この言語表現を伴う回答を機能的要素⁷⁾に分析したところ、日本側の2343件(98.6%)、韓国側の1632件(93.8%)の回答に[働きかけ]⁸⁾が用いられていた。本研究では調査談話の中心部分に当る[働きかけ]の述部表現を取り上げ、そこに使われた本動詞と補助動詞の授受表現を分析・考察する。

4.1. 本動詞

4.1.1. 使用状況

まず、[働きかけ]の述部にどのような本動詞が用いられているかを分析したところ、【表2】【表3】のような結果が得られた。(例10,11)は日本側と韓国側の回答例のをそれぞれ示したものである。

【表2】 日本側の本動詞

本動詞 \ 状況		ペン	資料
三項	借りる	43.7(509)	0.0(0)
	貸す	53.9(628)	0.1(1)
	使わせる	0.3(4)	0.0(0)
	見せる	0.0(0)	92.3(1086)
二項	使う	2.1(25)	0.0(0)
	見る	0.0(0)	7.6(90)
Total		100(1166)	100(1177)

【表3】 韓国側の本動詞

本動詞 \ 状況		ペン	資料
三項	빌리다	30.9(332)	0.0(0)
	보이다	0.0(0)	4.8(39)
	주다	1.6(13)	0.1(1)
二項	쓰다類 ⁹⁾	57.3(465)	0.0(0)
	보다	0.0(0)	95.1(781)
Total		100(879)	100(861)

(例10) 日本側の回答例

- ① 三項：借りるよ。
- ② 三項：貸してください。
- ③ 三項：使わせてもらっていい？
- ④ 三項：見せてください。
- ⑤ 二項：使うよ。
- ⑥ 二項：見ていい？

(例11) 韓国側の回答例

7) 機能的要素(move)は「会話の中で話し手が発するスピーチの最小の機能的な単位(津田(1989))」であり、談話レベルでの特徴や多様性を類型化する上で、有効な分析単位である。機能的要素は[恐縮][働きかけ]などのように[]を付けて示す。

8) [働きかけ]とは、例えば<状況1.ペン>で「ボールペン貸してもらえませんか」のように、借りるために相手に働きかける機能的要素であり、借りる場面で一番多く用いられたものである。機能的要素の分析などについての詳しくは拙稿(2009b)を参照されたい。

9) 「쓰다」の他に「사용하다」もあったので、両方合わせて「쓰다類」と示しておいた。

- ① 三項：불펜 좀 빌려도 되겠습니까?
- ② 三項：보여 주세요.
- ③ 三項：불펜 좀 주라.
- ④ 二項：불펜 좀 쓸게.
- ⑤ 二項：같이 보자.

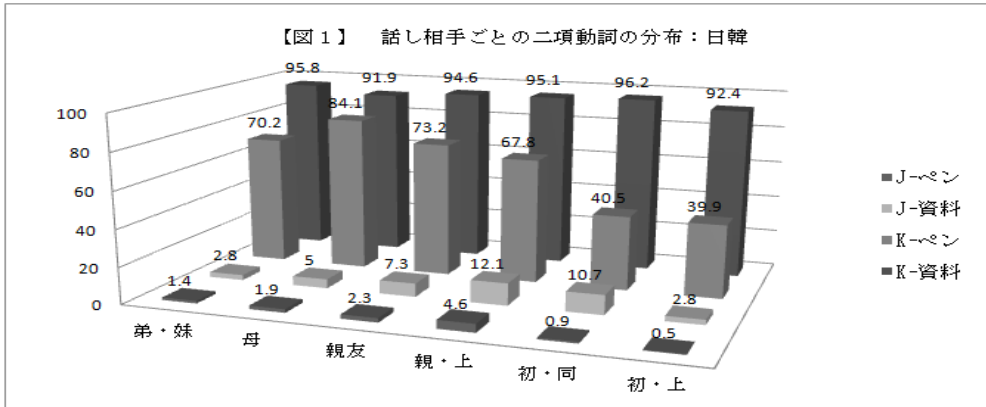
【表2,3】と(例10,11)の「二項」と「三項」とは、それぞれ「二項動詞」と「三項動詞」を略して示したものである。(例10,11)からわかるように、三項動詞を取る場合も二項動詞を取る場合も実際のコミュニケーションで「ガ」「ニ」「ヲ」の部分は省略されることが多い。

【表2】を中心に日本側の傾向を見てみると、まず、〈状況1.ペン〉では、「借りていい?」「貸して」のように「借りる(43.7%)」と「貸す(53.9%)」を用いる人が90%以上もある。しかし、〈状況2.資料〉では92.3%の人が「見せて」「見せてもらえますか?」のように「見せる」を用いている。要するに、〈状況1.ペン〉と〈状況2.資料〉とで用いられる本動詞は異なっているが、両方とも借りる人と貸す人、そして貸し借りの対象物が明示される「三項動詞」が用いられる点では一致している。すなわち、日本では「借りる」場面において述部の本動詞に三項動詞を用いる割合が高いと言えよう。

次に、【表3】を中心に韓国側の傾向を見ると、〈状況1.ペン〉では57.3%の人が「펜 좀 쓸게(ペンちょっと使うよ)」のように「쓰다類」を用い、その次に、「빌리다(借りる/貸す)」の使用率が30.9%を占めている。一方、〈状況2.資料〉では「보다(見る)」の使用率が95.1%を占め、他の動詞はあまり使われていない。要するに、〈状況1.ペン〉と〈状況2.資料〉とで用いられる本動詞は異なっているが、両方とも借りる人と貸す人、そして、貸し借りの対象物が明示されない「二項動詞」で、なおかつ、話し手の行動を表わす動詞である点では一致している。すなわち、韓国では述部の本動詞に話し手の行動を表わす二項動詞を用いる割合が高いと言えよう。

4.1.2. 話し相手・状況との関わり

本動詞の使用割合における日韓の相違は、話し相手や状況によって異なってくる可能性がある。そこで、話し相手ごとに用いられた本動詞の使用割合を状況別に分析したところ、【図1】のような結果が得られた。



【図1】の前から1列目はJ-ペン、2列目はJ-資料、3列目はK-ペン、4列目はK-資料、それぞれの状況での二項動詞の使用割合を示している。まず、日本側の傾向を見ると、【図1】の1,2列目のグラフが低いことから分かるように、日本はペンを借りる時も資料を借りる時もすべての相手に対して二項動詞を使うことが殆ど無い。すなわち、日本は相手や状況に関わりなくすべての場面で三項動詞を用いると言えよう。

一方、韓国側の傾向を見ると、【図1】の3,4列目のグラフは1,2列目の日本側の傾向に比べ遥かに高いが、その割合は状況や相手によってばらつきが見られる。「K-資料」の場合、どの相手に対しても90%以上の人二項動詞を用いているが、「K-ペン」での二項動詞の使用割合は「K-資料」より低く、相手との親疎関係によって相違が見られる。「K-ペン」の場合、「母、弟・妹、親友、親・上」の親しい相手に対しては84.1~67.8%の人が二項動詞を用いているが、初対面の人に二項動詞を使用する割合は40.5%、39.9%と少なかった。つまり、本動詞に貸し借りを明示しない韓国側の傾向は<状況1.ペン>より<状況2.資料>の方が多くことがわかった。

4.2. 補助動詞としての授受表現

4.2.1. 使用状況

本調査の回答に用いられた補助動詞としての授受表現の内訳を見ると、日本の場合は「～てくれる」「～てくださる」「～てもらう」「～ていただく」「～てちょうだい」の五つ、韓国の場合は「～아/어/여 주다」「～아/어/여 주시다」の二つであるが¹⁰⁾、実際の回答例を(例12, 13)に示しておく。

10) 授受動詞の他に用いられた補助動詞としては、日本側で「～てほしい」、韓国側で「～아/어/여 보다(～てみる)」があったが、使用数はいずれも少なかった。

(例12) 日本側の回答例

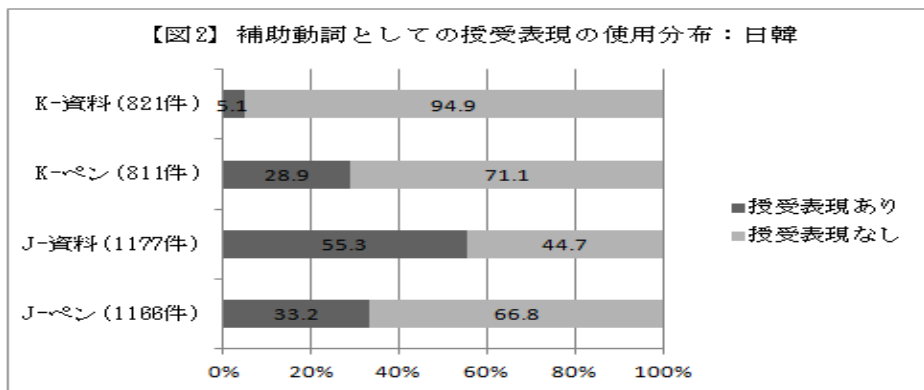
- ① ちょっとボールペン貸してくれる？
- ② 見せてください。
- ③ ペン貸してもらえませんか？
- ④ すみませんが、見せていただけませんか？
- ⑤ お願い、見せてちょうだい。

(例13) 韓国側の回答例

- ① 볼펜 좀 빌려 줄래?
- ② 자료 좀 보여 주세요.

(例12, 13)のように、借りる場面では、日韓ともに授受表現を用いることによって行動主の受益意識を表示している。授受表現の種類から見ると、日本の場合は「～てくれる」「～てくださる」「～てもらう」「～ていただく」「～てちょうだい」の五つの語形が使い分けられている。韓国の場合は(例13)に「～아/어/여 주다」「～아/어/여 주시다」の二つが提示されているが、「～아/어/여 주시다」は「～아/어/여 주다」に主体尊敬の接辞「-시-」が付加されたものである。つまり、韓国語の場合、形式の面では「～아/어/여 주다」の一種類だけが用いられているのである。

語形の違いは後で考察することにし、まず、補助動詞としての授受表現が使われているか否かという観点から日本と韓国の傾向を見てみた。



【図2】の「J-ペン」と「J-資料」を中心に日本側の傾向を見ると、授受表現の使用割合は、<状況1.ペン>より<状況2.資料>の方が約20%ぐらい高い。しかし、【図2】の「K-ペン」と「K-資料」を中心に韓国側の傾向を見ると、授受動詞の使用率は<状況2.資料>より<状況1.ペン>の方が高く、日本とは逆の傾向を見せている。要するに、韓国より日本の方で授受表現の使用割合が高いという傾向は<状況2.資料>に著し

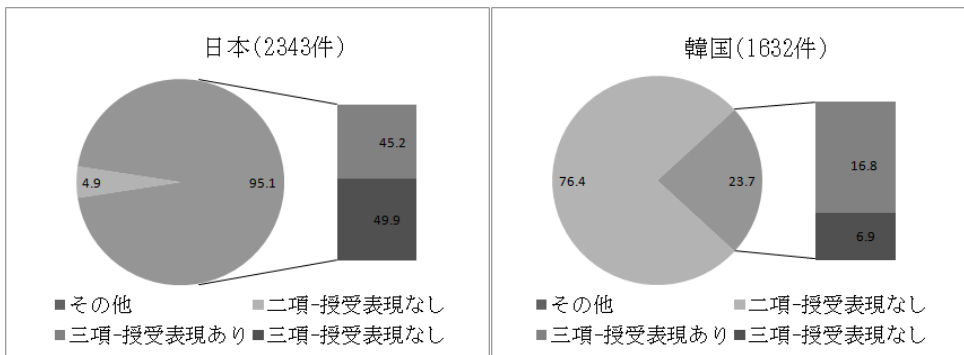
い。

このように状況によって授受表現を用いる割合の相違は、各状況で用いられた本動詞の種類との関連性をも予想される。そこで、本動詞と授受表現との関わりについて見てみることにする。

4.2.2. 本動詞との関わり

まずは、本動詞が三項動詞であるか二項動詞であるかによる授受表現の使用割合を見てみた。その結果、本動詞が二項動詞である場合は、日韓ともに補助動詞に授受表現の用いられた例が一件も見当たらず、補助動詞としての授受表現が結合したのは三項動詞のみであることがわかった。この結果を示したのが【図3】である。

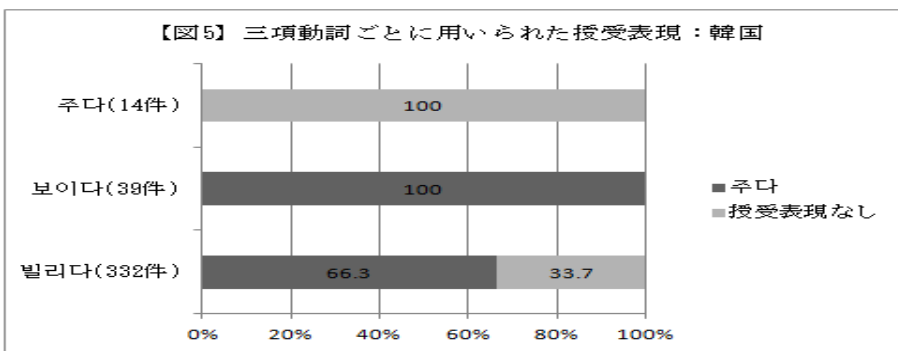
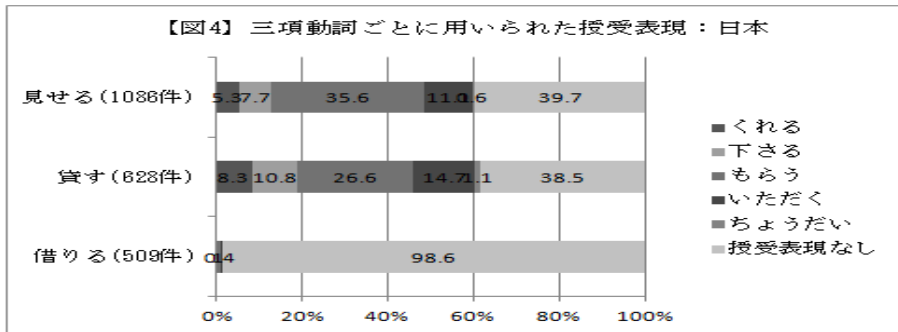
【図3】 日韓の本動詞別授受表現の分布(%)



【図3】の示し方を説明すると、円形図は本動詞の分布(二項/三項動詞/その他)を示している。日韓ともに三項動詞のみに授受表現が後続されているため、円形図の中で三項動詞の部分のみを拡大し、授受表現の使用の有無を四角形の図に示した。【図3】から、借りる場面で授受表現が後続する本動詞は日韓ともに三項動詞に限ることがわかる。

さらに、四角形の図を参考に三項動詞に授受表現が後続する割合を見ると、日本は50%ぐらいであるが、韓国は授受表現が後続する割合が高い。この日韓の相違については三項動詞の言語内的要因が予想される。

それでは、どのような三項動詞にどのような授受表現が補助動詞として後続しているのか。その分布における日韓の特徴を見てみる。



【図4】と【図5】は各動詞の使用頻度そのものにばらつきがあるので、左側の回答数(件数)を勘案して授受表現の分布を見てもらいたい。まず、【図4】11)の日本の場合を見ると、「見せる」と「貸す」には授受表現の後続することが多く、「見せてもらう」「見せていただく」「貸して下さる」「貸してもらう」「貸していただく」の言い方が多く用いられている。しかし、「借りる」は授受表現の後続することがほとんどなく、「借りていい?」のように許可を求める表現「～ていい」と結合して、<状況1.ペン>でのみ用いられている(【表2】参照)。このような動詞「借りる」が<状況1.ペン>での本動詞の4割を占めていたため、<状況2.資料>より<状況1.ペン>の方で授受表現の使用割合が低かったわけである(【図2】参照)。また、授受表現とほとんど結合しない「借りる」の使用率が<状況1.ペン>で高いことから、【図3】の日本側の四角形の図に示した三項動詞の授受表現との結合率が低くなっていると見られる。

次に、【図5】の韓国の場合を見ると、授受動詞「주다」が本動詞として用いられた例が少数あったが、当然ながら補助動詞として授受表現の後続例は見られなかった。本調査の回答で授受表現「～아/어/여 주다」が後続した本動詞は「빌리다」がその殆どを占めており、そのほかは「보이다」に後続する例が少しあるぐらいである。本動詞「빌리다」に「-주다」が後続した「빌려주다」は「貸す」の意味を持ち、<状況1.

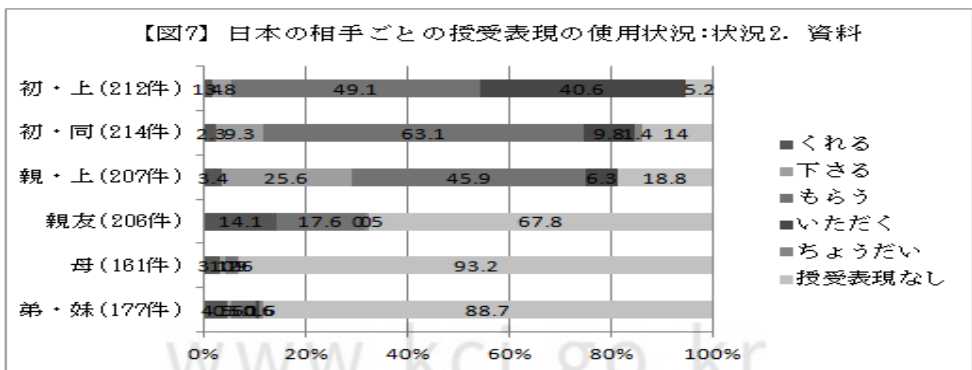
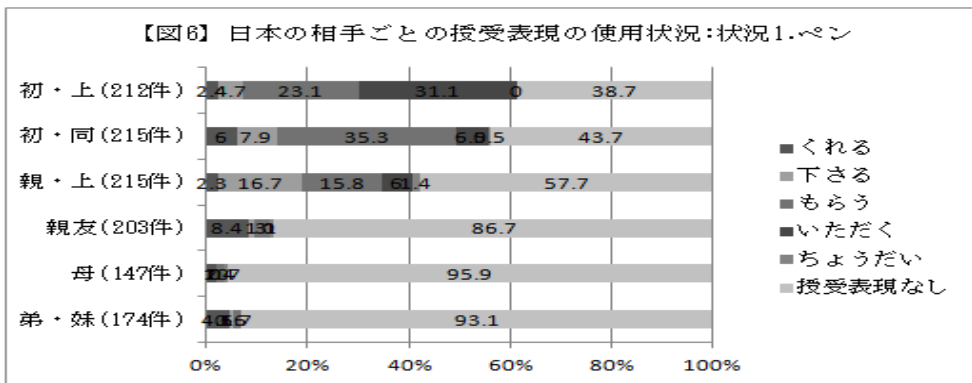
11)この他に、用いられた本動詞として「使わせる」があったが、4件しか見られなかったため、図に示していない。

ペン>でのみ用いられていた。一方、「보이다」に「~아/어/여주다」が後続した「보여주다」は<状況2.資料>でのみ用いられていた(【表2】参照)。このような結果から、<状況2.資料>より<状況1.ペン>の方で授受表現の使用割合が高かった【図3】の韓国側の傾向は、授受表現との結合率の高い「빌리다」が<状況1.ペン>でのみ用いられていたことに影響されたものと考えられる。また、授受表現との結合率の高い「빌리다」が多く使われていることから、【図3】の韓国側の四角形の図に示した三項動詞の授受表現との結合率が高くなっていると窺える。

以上から、<状況1.ペン>と<状況2.資料>における授受表現の使用分布の相違は、本動詞の言語内的要因と直接関わっていることがわかった。また、三項動詞に授受表現の後続したものと後続していないものとの割合が、日本は半々ぐらいで、韓国は後続したものの割合が高かったが、これにも本動詞の言語内的要因が関わっていると考えられる。

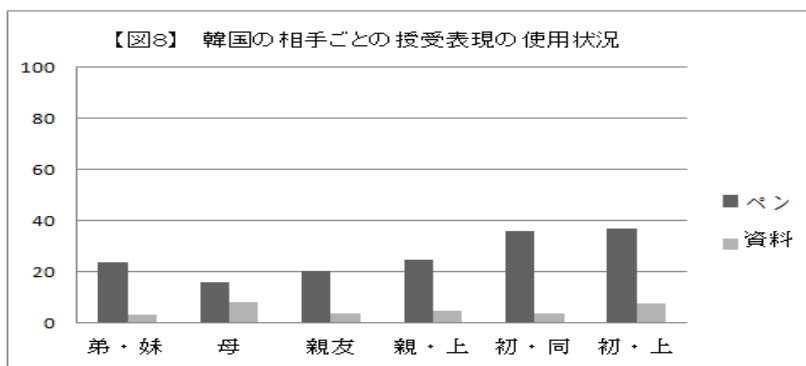
4.2.3. 話し相手・状況との関わり

授受表現の使用割合における日韓の相違は、話し相手が誰なのかによっても異なった傾向が見られた。まず、話し相手ごとに用いられた補助動詞としての授受表現の使用状況を示したのが【図6】と【図7】である。



【図6】 【図7】 の日本側の傾向を見ると、「母」「弟・妹」の所有物を借りる際は、殆どの人が授受表現を用いていない。それが「親友」の物となると、＜状況1＞では依然として授受表現の使用率が低いが、＜状況2＞では「～てくれる」「～てもらう」の割合が14.1%、17.6%を占めている。この他、「親・上」「初・同」「初・上」の物を借りる際の授受表現の使用は＜状況1＞より＜状況2＞の方が高いが、受け手主語の授受表現「～てもらう」「～ていただく」が授受表現の使用の半分以上を占めている点では両状況で類似した傾向が見られた。すなわち、「親・上」「初・同」「初・上」の物を借りる際、日本では韓国にない受け手主語の授受表現を多く使っていることが明らかになったが、これは「使役+てもらう/いただく(例：使わせていただきます)」という表現が、日本語にはあるが、韓国語にはないことに起因するのも知れない。

一方、話し相手ごとに用いられた授受表現「～아/어/여 주다」の韓国側の使用状況を見たところ、日本とは異なって＜状況1.ペン＞と＜状況2.資料＞との差が見られた(【図8】参照)。



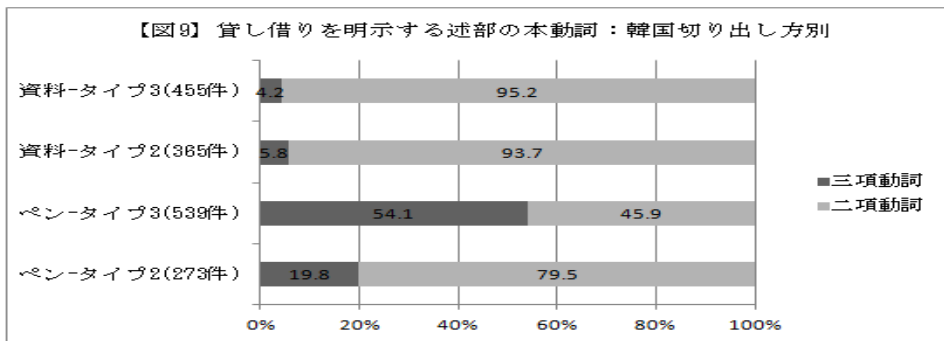
【図8】 からわかるように、＜状況2.資料＞では授受表現がどの相手に対してもあまり用いられていない。一方、＜状況1.ペン＞での授受表現の使用割合を見ると、初対面になるほど、少し増加する傾向にあるが、【図6】 【図7】 の日本側の傾向に比べるとかなり低い数値である。本動詞の側面でも類似した傾向が見られ、三項動詞の使用割合が＜状況2.資料＞より＜状況1.ペン＞の方が高かった(【表3】参照)。＜状況2.資料＞より＜状況1.ペン＞の方が三項動詞や授受表現の使用率が高い原因については今のところ明確ではない。これは今後の課題としたい。

以上、本動詞に貸し借りを明示するか否か、補助動詞に授受表現を用いるか否か、という側面から述部の表現を分析・考察した。しかし、さらに考えられる要因として、このような述部の表現の傾向は、コミュニケーション行動をどのように開始するかという「切り出し方¹²⁾」とも関わっていることが予想される。そこで、4.2.4では切り出し方(タイプ2・3)と述部

の表現との関わりを見てみる。

4.2.4. 述部表現と切り出し方との関わり

まず、借りながら一言言うタイプ²と借りる前に一言言うタイプ³に、それぞれ三項動詞と二項動詞がどのぐらいの割合で用いられているかについて見てみた。その結果、日本では切り出し方に関わりなく三項動詞の使用割合が約9割を占めていたが、韓国では日本より三項動詞を使う割合が低く、また、切り出し方や状況によっても相違が見られた(【図9】参照)。

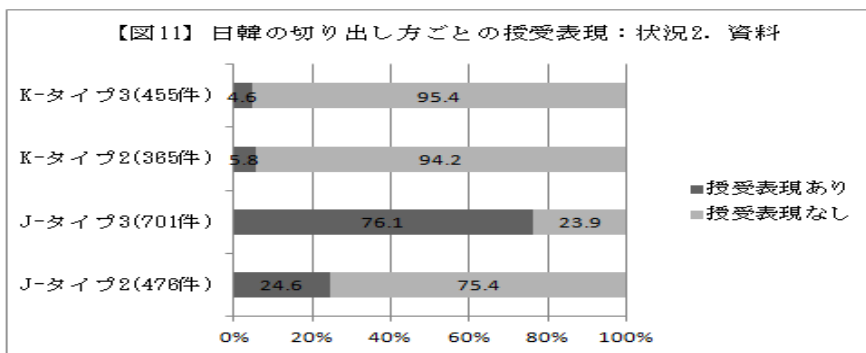
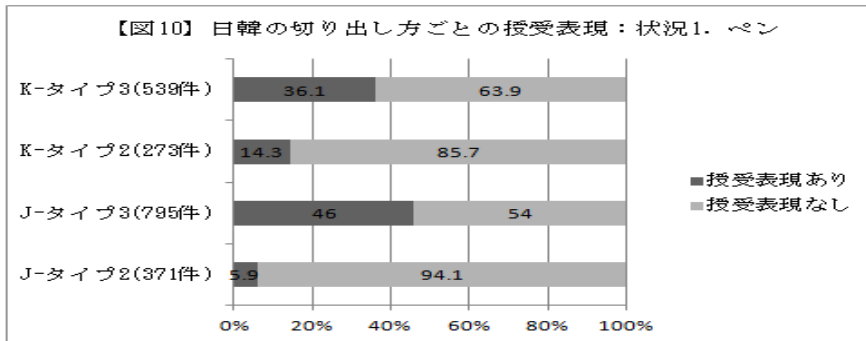


【図9】 からわかるように、<状況1.ペン>で三項動詞を用いる割合は借りながら言うタイプ²の場合19.8%で、借りる前に一言言うタイプ³の場合54.1%を占めているが、<状況2.資料>で三項動詞を用いる割合はタイプ²・³ともに10.0%にも達していない。

一方、補助動詞としての授受表現の使用割合は日韓ともに切り出し方、状況によって相違が見られた。

12) 切り出し方とは言語・非言語行動双方を含めて、どう行動を開始するかというパラメータのことであり、伝達手段(非言語、非言語+言語、言語)によって以下の三つのタイプに分けられる。

- ①タイプ1(非言語)：非言語行動によって行動を開始するタイプ。例えば、何も言わずに相手のボールペンを使うなど、いわゆる、無言行動。
 - ②タイプ2(非言語+言語)：非言語行動を取りながら言語表現を発することによって、行動を開始するタイプ。
例えば、相手のボールペンを取りながら「借りるね」のような言語表現を発することによって行動を開始するタイプ。
 - ③タイプ3(言語)：非言語行動を取る前に、言語表現を発することによって、行動を開始するタイプ。例えば、相手のボールペンを手取る前に、「貸して」などのように、一言断わることによって行動を開始するタイプ。
- 切り出し方の分析結果などについての詳しくは、拙稿(2012)を参照されたい。



まず、【図10】を見ると、＜状況1.ペン＞では日韓ともにタイプ2よりタイプ3の方が授受表現を多く使用している。しかし、＜状況2.資料＞の傾向を示した【図11】を見ると、日本は＜状況1.ペン＞に比べ授受表現の使用割合がタイプ2・3ともに高くなっているが、韓国は授受表現の使用割合がタイプ2・3ともに減っており、10%にも達していない。

すなわち、補助動詞としての授受表現は、日韓ともにタイプ2よりタイプ3の方で多く使用されるが、日本は＜状況1.ペン＞より＜状況2.資料＞の方が多く使用されており、韓国は＜状況2.資料＞より＜状況1.ペン＞の方が多く使用される。

5. おわりに

以上、借りる場面で用いられた「本動詞」と「補助動詞としての授受表現」を日韓比較してみた。以下、その結果をまとめた上で、ものの所有・領域意識から考察してみた。

- (1) 日本はほとんどの人が三項動詞を用いることによって本動詞に貸し借りを明示しており、韓国は二項動詞を取ることによって本動詞に貸し借りを明示しないことが多かった。

- (2)補助動詞として授受表現を使用する割合は、韓国より日本の方が高かった。日本は<状況1.ペン>より<状況2.資料>の方が授受表現を使用することが多かったが、特に初対面の人や親しい年上の人の物を借りる際、韓国にない受け手主語の授受表現が多く使われた。一方、韓国は相手を問わず<状況2.資料>で授受表現を殆ど使用しておらず、<状況1.ペン>のみで15.9～36.8%の使用率が見られた。
- (3)借りる場面で授受表現が後続する本動詞は日韓ともに三項動詞に限られていた。また、三項動詞に授受表現の後続したものと後続していないものとの割合が、日本は半々ぐらいであったのに対し、韓国は後続したものの割合が高かった。
- (4)述部の表現と切り出し方との関わりを見ると、日本は切り出し方に構わず三項動詞を多く使っていたが、韓国はタイプ2よりタイプ3の方が三項動詞を多く使っていた。また、補助動詞としての授受動詞は日韓ともにタイプ2よりタイプ3の方が多く使われていた。

貸し借りを明示する三項動詞を頻繁に用いて受益意識を表示する日本側の行動は、所有物・所有権の移動に対する高い意識を反映したものと思われる。これに対し、貸し借りや受益関係を言語的に表示することの少ない韓国側の行動は、相手の所有をあまり意識しないものと思われる。このような結果から、日本では所有の移動をより意識した言葉遣い(述部の表現)をするのに対し、韓国では所有の移動をあまり意識せず、その代わりに話し手のこれからの行動に注目した言葉遣い(述部の表現)をすると言えるであろう。すなわち、韓国に比べて日本の方が物の所有・領域を認めた上での表現になっていると言えよう。このことは、従来の研究でもたびたび指摘されてきたことであるが、今回の調査はそれを実証的に裏付ける結果を示したことになる。ただし、韓国でも初対面の人々の資料を見せられてからは三項動詞を用いて本動詞の部分に貸し借りを明示することが多かった。このことから、韓国人も初対面の間柄では多少所有の移動を意識した言葉遣いをしていると考えられる。また、日本でも家族の物を借りる際は両状況で補助動詞としての授受表現をあまり使用しない傾向が見られたが、このことから日本も家族間では所有の移動・領域をあまり意識せずに行動しようとするという話し手の心的態度が窺われる。

今回は大学・大学院生を対象に行ったアンケート調査の回答に見られた本動詞と補助動詞としての授受表現に注目して日韓言語行動を分析し、物の所有・領域意識からの考察を試みた。だが、物の所有・領域意識は世代によって異なる可能性があるため、今回の分析結果が日本と韓国の全世代を代表するものとは限らない。日韓言語行動の異同を明らかにするためには、世代差を含め、引き続き多様な側面からの総合的な考察が必要であると言えよう。また、三項動詞と授受表現は、構文上、抱き合わせで出てくることになるかも知れないので、構文を使った分析など、両者の関係性を考慮した分析考察が必要であると考えられる。なお、二項動詞と三項動詞の使用分布についても、表現類型との関連性を考慮した分析考察が必要であろう。いずれも今後の課題としたい。

【参考文献】

- 李鳳姫(1990)「上級の日本語教育－韓国入学者の場合－」『日本語教育』71 日本語教育学会pp.33-43
- 任栄哲・井出里咲子(2001)「特集「授受」の言語学－人と人とを繋ぐもの－なぜ日本語に授受動詞が多いのか」『月刊言語』30-5、pp.42-45
- 大江三郎(1975)『日英語の比較研究』、南雲堂
- 荻野綱雄・金東俊・梅田博之・羅聖淑・盧顕松(1990)「日本語と韓国語の聞き手に対する敬語用法の比較対照」『朝鮮学報』136、朝鮮学会、pp.1-51
- 奥津敬一郎(1996)「第19章 日本語の授受動詞構文－英語・朝鮮語と比較して－」『拾遺日本文法論』、ひつじ書房、pp.347-369
- 奥山洋子(1998)『일본인은 이상해 한국사람 못말려』 시사일본어사、pp.114-116
- 生越まり子(1995)「依頼表現の対照研究－朝鮮語の依頼表現－」『日本語学』10 pp.50-60
- 尾崎喜光(2005)「依頼行動と感謝行動との<関係>に関する日韓対照」『社会言語科学』8-1、社会言語科学会、pp.106-119
- 蔽廷美(1997)『ポライトネスにおけるフェミニズム言語研究の考察－日本と韓国の大学生の依頼談話における丁寧度の男女差の比較を通じて－』、東京大学大学院総合分化研究科言語情報科学専攻修士論文
- _____ (1999)「日本語と韓国語の依頼の構造ストラテジー－moveの観点から」『言語情報科学研究』4、東京大学言語情報科学研究会 pp.47-68
- 河村光雅(1999)「日朝両言語における依頼表現の違い」『日本語・日本文化』25、大阪外国語大学留学生日本語教育センター pp.47-61
- 姜錫祐(2007)「韓国人と日本人のコミュニケーション行動に関する比較対照研究－依頼行動における依頼主の意識に注目して－」『日本語学研究』19、韓国日本語学会 pp.13-28
- 近藤安月子・姫野伴子(2012)『日本語文法の論点43』研究社 pp.53-61
- 鄭惠卿(1995)「親疎관계에 의한 依頼表現의 使用法－「テ+授受動詞」構文의 分析을中心으로－」『日語日文学研究』27-1 韓国日語日文学会 pp.27-55
- 津田葵(1989)、『社会言語学』、『英語学大系第6巻 英語学の関連分野』、大修館書店
- 中田智子(1990)「発話の特徴記述において－単位としてのMOVEと分析の観点－」『日本語学』9-11、明治書院、pp.112-118
- 盧姓鉉(2008)「本動詞と補助動詞の授受表現の使用から見た言語行動の日韓対照－相手の所有物を借りる場面で－』、東京大学21世紀COEプログラム「心とことば－進化認知科学的展開」研究報告書『日本語と朝鮮語の対照研究Ⅱ』、pp.91-108
- _____ (2009a)『日韓コミュニケーション行動の対照研究－貸し借り行動・意識に関する調査結果に基づいて－』、東京大学大学院博士論文
- _____ (2009b)「貸し借り言語行動の日韓対照－談話構造の側面から－」『日本言語文化』14

韓国日本語文化学会 pp.63-84

_____ (2012) 「日韓コミュニケーション行動の切り出し方-貸し借り場面での無言行動と領域意識を中心-」 『日本文化研究』 42 동아시아일본학회 pp.173-186

吉川千鶴子(1995) 『日英比較 動詞の文法』、くろしお出版

要 旨

本研究では、借りる場面で用いられた「本動詞」と「補助動詞としての授受表現」に注目して日韓言語行動を比較考察した。その結果、以下のことが明らかになった。

- (1) 日本はほとんどの人が三項動詞を用いることによって本動詞に貸し借りを明示しており、韓国は二項動詞を取ることによって本動詞に貸し借りを明示しないことが多かった。
- (2) 補助動詞として授受表現を使用する割合は、韓国より日本の方が高かった。日本は<状況1.ペン>より<状況2.資料>の方で授受表現を使用することが多かったが、特に初対面の人や親しい年上の人の物を借りる際、韓国にない受け手主語の授受表現が多く使われた。一方、韓国は相手を問わず<状況2.資料>で授受表現をほとんど使用しておらず、<状況1.ペン>のみで15.9~36.8%の使用率が見られた。
- (3) 借りる場面で授受表現が後続する本動詞は日韓ともに三項動詞に限られていた。また、三項動詞に授受表現の後続したものと後続していないものとの割合が、日本は半々ぐらいであったのに対し、韓国は後続したものの割合が高かった。
- (4) 述部の表現と切り出し方との関わりを見ると、日本は切り出し方に構わず三項動詞を多く使っていたが、韓国はタイプ2よりタイプ3の方が三項動詞を多く使っていた。また、補助動詞としての授受動詞は日韓ともにタイプ2よりタイプ3の方が多く使われていた。

このような日韓の相違について物の所有・領域意識からの考察を試みた。

キーワード：領域意識、本動詞、二項動詞、三項動詞、補助動詞、授受表現

투 고 : 2012. 11. 30
1차 심사 : 2012. 12. 15
2차 심사 : 2013. 1. 5